

—《書評》—

氣賀澤保規編著 法藏館

『隋唐洛陽と東アジア——
洛陽学の新天地』

(東京大学) 佐川 英治

2020年に刊行された本書でまず目を引くのはその副題であろう。編者の氣賀澤氏は言わずと知れた隋唐史の大家で、府兵制の研究をはじめとして、これまでも政治史や仏教史、そして墓誌を主とする石刻資料の研究で大きな成果を挙げてこられた。氣賀澤氏が世界に先駆けて最初に洛陽学を提唱されたのは2010年のことで、それから洛陽学は中国でも唱えられるようになった。本書は洛陽学の創設から10年をへて今日における洛陽学の成果を世に問うものである。そこに現れる洛陽学の現在とはいかなるものか。中国史を研究する者にとってはいやが上にも注目を促される一冊である。

まずは本書の構成を紹介しよう。なお、紙幅の都合により副題は省略した。

《序論》隋唐洛陽学の意義と課題 (氣賀澤保規)

第I部 政治社会史上の洛陽

北魏の洛陽遷都と孝文帝の改革 (川本芳昭)

北魏洛陽における権貴勢家第宅の奢侈の風始末と孝文帝の遷都改革 (夏炎)

煬帝大業十一年の洛陽大朝会とその背景 (氣賀澤保規)

複都制再考 (佐藤文子)

安史の乱における突厥王族阿史那氏の動向 (速水大)

「党争」の残照 (竹内洋介)

隋・唐・五代洛陽宮の政治空間について (松本保宣)

墓誌からみる唐代洛陽の万安山 (毛陽光)

第II部 宗教空間からの洛陽世界

寺院・摩崖・石窟の位置からみた交通路 (北村一仁)

北周末より唐代初期における洛陽仏教の動向 (宮嶋純子)

流動する政治景観 (孫英剛)

則天武后の明堂と嵩山封禪 (大西磨希子)

新出「岩和尚墓誌」に見る唐代洛陽の天宮寺 (王慶衛)

唐代洛陽大聖真觀考 (雷聞)

龍門広化寺善無畏三蔵真身考 (榎本淳一)

《特別寄稿》日本の洛陽研究に関する一考察 (黄婕)

洛陽は古くから「土中」すなわち天下の中心とみなされ、九朝の都とも称されるごとく歴代王朝が都城を築いたところである。さらに東アジアの仏教美術にとって重要な龍門石窟を擁する場所であれば、歴史学者の洛陽に対する関心はもともと低くはなかった。にもかかわらず、いま改めて洛陽学を提唱する理由はどこにあるのか。〇〇学という地名を冠した新領域の学問の創設に敦煌学の影響があることはまちがいない。敦煌学は20世紀初めに敦煌莫高窟で敦煌文書が発見されたことに由来し、文書が各国の探検隊によって持ち帰られたことなどにより、当初より国際的な性格を有し、歴史学から文学、哲学、宗教学、美術史学、地理学、考古学にわたる学際的な研究領域へと発展した。

これに対して、新たな洛陽学の基礎となるのは、洛陽で陸統と発見されている墓誌である。氣賀澤氏の推計によれば、1998年までに洛陽で発見された唐代墓誌は約2500点であったが、2012年には累計で約4000点に増加し、今日ではおよそ6000点に達している。この数は西安・関中地区のおよそ2200点を遥かにしのぎ、現在把握される唐代墓誌およそ12000点の約半数を占めるという。そもそも墓誌の流行は北魏時代の洛陽に始まる。墓誌の製作は洛陽の地域性とも結びついた碑文習慣なのである。今日の北朝隋唐史研究においては墓誌の史的価値はきわめて高いものがあるが、その

ような墓誌文化を生み出し育んだ場所としての洛陽の地域性への関心は決して高くはなかった。

洛陽学のもう一つの基礎が東アジアにおける洛陽の位置づけである。近年、吉備真備の書になるとされる墓誌が発見されたが、それは洛陽で亡くなった李訓という人の墓誌であり、洛陽を舞台とした国際交流の一端が知らされた。氣賀澤氏は、魏の明帝のときの邪馬台国の女王卑弥呼の遣使、隋の煬帝のときの小野妹子の遣隋使、高宗・則天武后時代の白村江の戦いなど、中国王朝が政治の軸を洛陽に移した時期に、日本からも新たな行動が起こされ、相互作用が生み出されたとする。近年の中国では長安を国際的な文明の中心と位置づけて学際的に研究する長安学が提唱され、研究所が設置されたりしているが、洛陽には長安とはちがった独自の中心性があり、ゆえに長安学と並んで洛陽学が必要であるとする。

本書の各論には個別的なテーマが並ぶが、おおむね第I部は後者の課題、第II部は前者の課題に対応したものといえよう。

第I部の川本氏は、北魏洛陽の墓誌の盛行は、孝文帝の強いリーダーシップの下で中華の再生を意図する施策の一環として実行されたものであり、洛陽遷都に連動したものであったとする。一方、夏氏は、孝文帝が洛陽遷都によって押さえ込もうとした奢侈の風は、遷都後の洛陽でも衰えることはなかったとする。氣賀澤氏は、615年に洛陽で開かれた大朝会について、高句麗遠征が行きづまるなか、勝利を演出するために煬帝が各国に呼びかけ洛陽で開催されたものではないかとし、倭国の遣隋使についても隋からの呼びかけを想定する。佐藤氏は、平城京の陪都とみなされてきた保良都と由義宮について、もともとは政権抗争のなかで首都を目指して建設されたものであったとする。速水氏は、洛陽出土と考えられる墓誌を通じて安祿山の腹心となった突厥王族の動向を追い、竹内氏は、李徳裕の洛陽帰葬が、その後の李

徳裕の名誉回復、李派の復権を導く政治的な契機になったとする。松本氏は、北宋の開封宮城の先蹤とされる隋唐洛陽宮について、その東西軸構造に注目して機能と淵源を探る。毛氏は、洛陽の南の万安山が、唐代にいかにして名門貴族の埋葬地となっていくかを出土の墓誌からたどる。

第II部の北村氏は、各地にのこされた碑文や小規模な石窟を実地調査で調べ上げ、洛陽東南の山間部の交通路を復元する。宮嶋氏は、隋代から唐初期にいたる洛陽の仏教界の状況を追跡する。孫氏は、洛陽東南の緱山山頂に則天武后が建て、中宗期に一部毀損が加えられた「昇仙太子碑」の分析を通じて武周期と李唐復活期の政局を論じ、大西氏は、則天武后の皇帝即位を正当化する『大雲経疏』において、武后による洛陽の明堂建設や嵩山での封禪が仏教的な聖性の根拠としても利用された意味について論ずる。王氏は、748年に洛陽の天宮寺で亡くなった岩禪師の墓誌を手がかりに、唐代洛陽における禅宗の発展と天宮寺の役割について論じ、雷氏は、皇室の道観であった睿宗大聖真觀の歴史を多くの墓誌を用いつつ精緻に復元する。榎本氏は、僧侶の真身(ミイラ)信仰の淵源をたどり、唐末・五代の社会不安のなかで広まり、宋代に洛陽龍門で善無畏三蔵の真身を礼拝した齋然によって日本に伝えられた可能性を論ずる。

最後に黄論文は、洛陽の重要性に注目した最初の議論として内藤湖南の文化中心説を挙げ、「日本における洛陽研究目録」を載せる。

以上のごとく、洛陽をテーマに日中からこれだけの多彩な論文が集まるといところで洛陽学の豊かな可能性が示されている。しかも文学や考古、仏教美術や書道芸術などなお多くの分野に連携拡大の余地を残す。またぜひ洛陽をテーマとした博物館や美術館での特別展も企画して欲しい。洛陽学の新天地はまだまだ広いと言えよう。今後のさらなる発展に期待したい。

(2020年12月, 392ページ, 5,500円+税)